

第6回 貴志二彦『ワイルドの二重人格』

大正3年(1914)9月の貴志二彦『ワイルドの二重人格』(梁江堂書店・杉本梁江堂)は、平成9年(1997)10月の石崎等「ワイルドと大正文学」(山田勝編/日本ワイルド協会協力『オスカー・ワイルド事典』(北星堂書店)で初めて紹介された文献である。これまでの「ワイルド書誌」と呼ばれるものには紹介されなかった文献である。

明治・大正期のワイルド書誌をまとめた以下の書誌にもこの貴志二彦『ワイルドの二重人格』は取り上げられていないのである。

本間久雄「参考書目の事」(『英国近世唯美主義の研究』東京堂、1934年5月)

平井博「Bibliography of the Reference Books on Oscar Wilde」(『福島大学学芸学部論集』第5集、1954年3月)

平井博「参考文献書誌」(『オスカー・ワイルドの生涯』松柏社、1960年4月)

平井博「日本に於けるオスカー・ワイルド書誌(その1)」(『福島大学学芸学部論集』人文科学、第13集の2、1962年3月)

平井博「日本に於けるオスカー・ワイルド書誌(其二)」(『福島大学学芸学部論集』人文科学、第14集の2、1963年3月)

井村君江「日本に於けるオスカー・ワイルド書誌」(『鶴見大学紀要』第2部、外国語・外国文学編、第13号、1976年3月)

平井博「日本における Oscar Wilde 書誌」(『オスカー・ワイルド考』松柏社、1980年7月)

貴志二彦『ワイルドの二重人格』は国立国会図書館には所蔵されているが、インターネット検索で Jcross、webcat plus などを利用して所蔵図書館がほとんどない状態である。本書の概要や意義を含め、書誌的にも貴重な文献

だけに詳細に紹介していきたい。

(1) 概要

大正3年(1914)9月の『ワイルドの二重人格』(梁江堂書店・杉本梁江堂)はカナメ叢書第6編として出版されたが、著者の貴志二彦は第4編のロスタン『動物劇「雄鶏」』、第8編のフライタハ『劇と技巧』、第14編のオイケン『文明と芸術と道徳』の翻訳も担当している。

著者の貴志二彦を紹介する文献がほとんどなく、はっきりしない部分が多いが、国立国会図書館のデータベースには「貴志二彦」(キシツギヒコ)とあるが、生没年も記されていない。

書名についてもいろいろと複雑な状況がある。明治・大正時代にありがちな書名に関する矛盾がある。中トビラ、奥付、広告には『ワイルド二重人格』とあり、本文等には『ワイルドの二重人格』との表記になっている。国立国会図書館の和図書名では『ワイルドの二重人格』として登録されているので、本書でもこれに準じることとしたい。

『ワイルドの二重人格』は「ワイルドの生涯」・「ワイルドの思想」・「ワイルドの人格」の3部から構成されている。以下はそれぞれについて紹介しておきたい。

(2) 「ワイルドの生涯」

「ワイルドの生涯」の主な内容は以下の通りである。特に注目しておきたいのは、ワイルドのオックスフォード大学時代の記述である。

(一) 天才の生い立ち

彼の両親

生れた家

彼の幼時

小学の頃

中学の頃
大学の頃
ラスキンと彼

(二) 天才の爛熟

下宿生活
美的装束
詩集出版
米國へ
巴里へ
貧苦へ
結婚
奮闘

(三) 天才の頽廢

醜猥事件
證據書類
罪の論告
入獄
獄中
出獄の後
漂浪の旅
噫！

「ワイルドの生涯」ではワイルドの生没年を「千八百年五十四年八月十六日生」で「千八百年九十八年十一月三十日没」と記しているが、これは「千八百年五十四年十月十六日生」の「千九百年十一月三十日没」の間違いである。牛津（オックスフォード）大学ではラスキンから熱烈な印象と感化を受けた記述はあるものの、ペイター、マファフィの名は見られない。

(3) 「ワイルドの思想」

「ワイルドの思想」では「審美主義」・「希臘思想」・「ラスキン」・「超人思想」・「愛」・「批評」を取り上げている。外部生活（実際生活・物質生活）を「ワイルドの生涯」とし、精神生活を「ワイルドの思想」として紹介した。「審美主義」の説明として、

「社會改良主義下の人間靈性」と彼の『意向』の二論説と『ドリアン、グレーの繪姿』に於て明瞭に窺ひしることが出来る。⁽¹⁾

と、記している。「希臘思想」では、

我々人間生活に於ける外部生活と内部生活、或は肉的生活と靈的生活との最も圓滿典雅な調和融合と云ふ上に立つてゐるものと云つて宜い、言ひ換えると自然と人生の一致、思想と生活の融合、藝術と現實との抱擁、靈肉一致は其思想の第一義となつてゐる⁽²⁾

と説明し、「ワイルドの美至上主義の全く如上の希臘思想に其淵源を發してゐる」⁽³⁾と結んでいる。「ラスキン」では美至上主義という点においては、ラスキンとワイルドは思想の一致を認めながら、両者の相違については、「ラスキンは其美の源を自然に置き更に其美の創造者を神とし、其美の根底を道德の上に置く」⁽⁴⁾のに対して、

ワイルドの思想に包まれた美と云ふのは人間の創造した美である自然にも人生にも未だ却て例の無い新しい天才の靈性のうちに創造された美である。更に善悪に係らず自由に創造された美である⁽⁵⁾

と、指摘している。明治44年(1911)3月の本間久雄「オスカー・ワイルド論」にもラスキンからの影響を受けたとする内容は紹介されていたが、ラスキン

とワイルドの相違を提示したのは貴志二彦が初めてではないだろうか。「超人思想」では、「ワイルドの思想の根底をなしてゐる吾と如上の希臘思想の半面には近代思想の根底をなしてゐる所謂超人思想が融合してゐる」⁽⁶⁾とニーチェなどへ言及している。「愛」では *De Profundis* と *The Ballad of Reading of Gaol* を取り上げ、獄中以前と比較して、

前期の全然自我思想、超人思想中の自我主義を脱して無我の靈域に這入ると共に其美至上主義は「悲哀」と「愛」との二つの思想に依って宗教的の句を持ち博愛主義に變つて來たのである⁽⁷⁾

と、*De Profundis* でのワイルドの変容を見事に捉えている。「批評」はワイルドを近代思想から見た立場でニーチェの「芸術と人生」との問題を徹底したと指摘している。

(4) 「ワイルドの人格」

「ワイルドの人格」の主な内容は以下の通りである。

(一) ワイルドの性格

人の性格
彼の遺傳
神経の敏感
想像の力
彼の性格

(二) 人格

二重人格
天才
初期の頃
後期

ここでは書名にもなっている「二重人格」の定義が記されている。

二重人格と此人格の分裂を意味するのである。而も此永い生涯を通じての人格の分裂、二重人格とは主として其人の「思想」と其人の「社会本能」と「生存」との間に起こるのである。⁽⁸⁾

貴志二彦の言う「二重人格」とは心理学的要素に重点を置いた意味ではなく、精神生活の分裂という意味合いが強い。「思想」とは精神生活であり、「社会本能」とは社会的な生活から養成された社会的な習慣、風俗、制裁等から自然に造られ遺伝された本能であり、「生存本能」とは性欲、食欲といった動物性のことであると説明している。

まとめ

本書は *De Profundis, Intentions, The Picture of Dorian Gray* といった作品からの引用なども少しはあるが、「ワイルドの生涯」の紹介と「ワイルドの思想（精神生活）」に重点が置かれている。本書の大きな特徴は、ワイルドの芸術至上主義をラスキンと比較したことである。美の根底に道徳を置いていたラスキンとワイルドの相違をはっきりと断言していることである。

参考資料

佐々木隆「大正時代のワイルド受容」(『武蔵野短期大学研究紀要』武蔵野短期大学、2001年6月)

注

- (1) 貴志二彦『ワイルドの二重人格』(梁江堂書店・杉本梁江堂、1914年9月)、p.51.

- (2) Ibid., p.55.
- (3) Ibid., p.56.
- (4) Ibid., p.57.
- (5) Ibid., p.58.
- (6) Ibid., p.59.
- (7) Ibid., p.66.
- (8) Ibid., p.84.